

池田市埋蔵文化財発掘調査概報

1986年度

1987年3月

池田市教育委員会

池田市埋蔵文化財発掘調査概報

1986年度

1987年3月

池田市教育委員会

序 文

縁豊かな五月山と雄大な猪名川の流れに育まれた池田市は、古代から現代に至るまでこの地方の政治、経済、文化の中心として発達してきました。

近年では大阪のベッドタウンとしての役割も担い、多くの住宅が建設されるとともに道路、公園、下水道などの生活基盤が着々と整備され、住宅都市として急激な開発が推し進められてきております。

しかし、こうした開発の代償として先人が私たちに残してくれた貴重な文化財が破壊散逸していくのも事実であります。

膨大な文化財の破壊と保護、この二つの側面の矛盾はますます激しいものとなり、現代社会において非常に深刻な問題になっておりますが、文化財を保護し未来へ継承することは現代に生きる私たちの責務です。また、文化財から私たちと同じ郷土に生きた先人の知恵や経験、或いは反省を学びとることで、未来に向って住みよい、豊かな市民生活が実現できるのではないかでしょうか。

この報告書は、以上のことと踏まえ、危機に直面している遺跡について、国及び大阪府の補助を受けて実施した発掘調査の概要報告書であります。

調査の実施にあたっては、多くの御指導、御助言をいただいた諸先生や関係機関をはじめ、土地所有者、近隣住民の方々には文化財保護に対して格別の御理解と御協力をいただきました。心より感謝と敬意を表し、発刊の御挨拶といたします。

昭和62年3月

池田市教育委員会

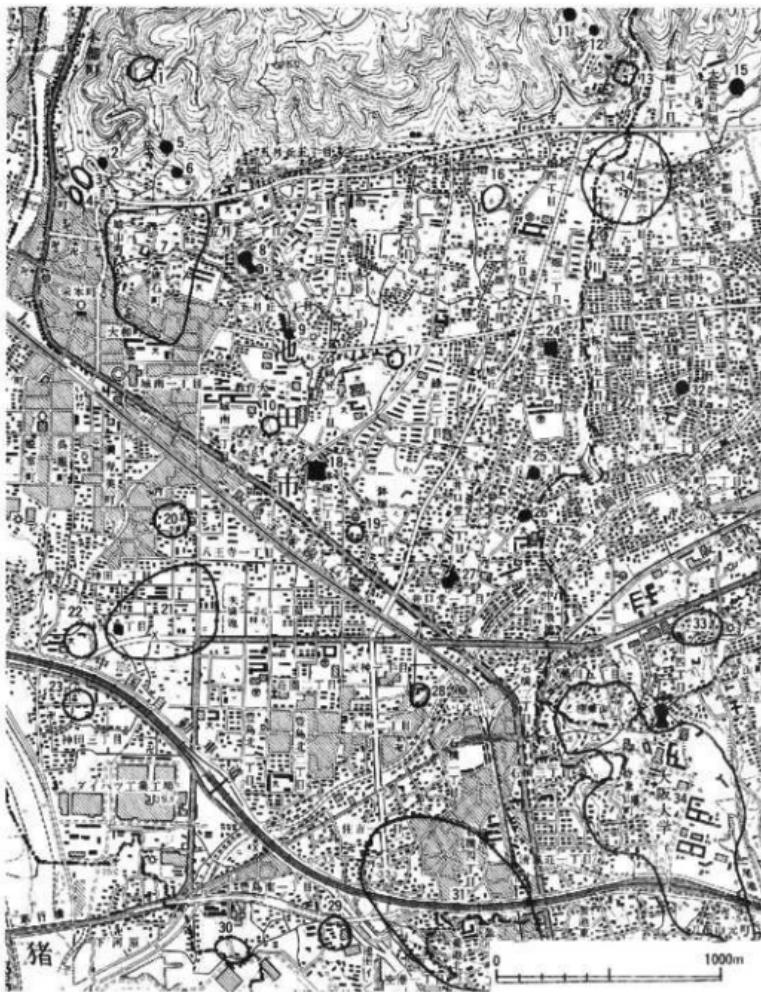
教育長 片山 久男

例　　言

1. 本書は、池田市教育委員会が昭和61年度国庫補助事業（総額3,000,000円、国庫50%、府費25%）として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査概要報告書である。
2. 本年度の調査は、二子塚古墳、宮の前遺跡、池田城跡、神田北遺跡について実施した。調査は昭和61年7月12日～昭和62年3月18日までの間、発掘調査ならびに整理作業を行なった。
3. 本書の編集、執筆、写真撮影は田上雅則（池田市教育委員会社会教育課）が行なった。
整理作業は、野村大作、石賀英樹、大槻恭嗣、今井直美、島田　聖、古池祐子、寺田武志の協力を得た。
4. 調査の進行にあたって、大阪青山短期大学専任講師富田好久氏、池田市立池田中学校教諭橋高和明氏、大阪府教育委員会文化財保護課堀江門也氏・亀島重則氏により、御指導、御助言をいただいた事に対して深く感謝いたします。
5. 調査に際して、土地所有者、並びに近隣住民の方々に、文化財保護及び調査に対して深く御理解をいただいた事について、各報告の例言に明記するとともに、深く感謝いたします。

目　　次

I. 二子塚古墳.....	1
II. 宮の前遺跡（86-1次・86-2次）.....	23
III. 池田城跡.....	37
IV. 神田北遺跡.....	49



- | | | | |
|-------------|-----------|------------|--------------|
| 1. 愛宕神社遺跡 | 2. 紅葉古墳 | 3. 五月山公園遺跡 | 4. 伊藤太神社参道遺跡 |
| 5. 鳥三堂古墳 | 6. 鳥三堂南古墳 | 7. 池城跡 | 8. 池田茶臼山古墳 |
| 9. 五月ヶ丘古墳 | 10. 鈴塔北遺跡 | 11. 善海1号墳 | 12. 善海2号墳 |
| 13. 石積廻寺 | 14. 新稻西遺跡 | 15. 大谷塚古墳 | 16. 京中遺跡 |
| 17. 豊南池遺跡 | 18. 鈴塔古墳 | 19. 鈴塔南遺跡 | 20. 宇保遺跡 |
| 21. 神田北遺跡 | 22. 門田遺跡 | 23. 神田南遺跡 | 24. 野田塚古墳 |
| 25. 狐塚古墳 | 26. 石橋古墳 | 27. 二子塚古墳 | 28. 天神遺跡 |
| 29. 住吉宮の前遺跡 | 30. 豊公南遺跡 | 31. 宮の前遺跡 | 32. 中尾塚古墳 |
| 33. 澄川遺跡 | 34. 待兼山遺跡 | | |



二子塚古墳発掘調査概要報告

例　　言

1. 本書は池田市井ノ堂1丁目5番に所在する二子塚古墳の発掘調査概要報告である。
2. 発掘調査は昭和61年12月12日から昭和62年1月31日にかけて実施した。
3. 発掘調査は、本市教育委員会社会教育部社会教育課社会教育係が実施し、田上雅則が現地を担当した。
4. 第10回墳丘測量図は大阪府教育委員会文化財保護課より提供していただいた。
5. 土地所有者には文化財保護を御理解され、調査の実施について快く承諾していただき、また近隣住民の方々には調査に際し色々とお世話になった事を記し、深く感謝いたします。

目　　次

I. まとめ.....	3
II. 古墳と周辺の遺跡.....	4
III. 調査の概要.....	5
IV. 石室.....	10
V. 出土遺物.....	14
VI. まとめ.....	15

I. はじめに

二子塚古墳は池田市井口堂1丁目5番に所在する。本墳は派生丘陵末端部に築造された後期古墳で、墳頂に稻荷神社が祀られている事から稻荷山古墳とも称され、從来から双円墳として周知されてきたものである。⁽¹⁾しかし、最近では双円墳とするよりは前方後円墳とすべきであると言う見解も幾つか示され、また今までに一度も発掘調査が行なわれておらず、墳丘形態、或いは正確な時期や葺石、埴輪の有無など基本的な知見が全く得られていない。

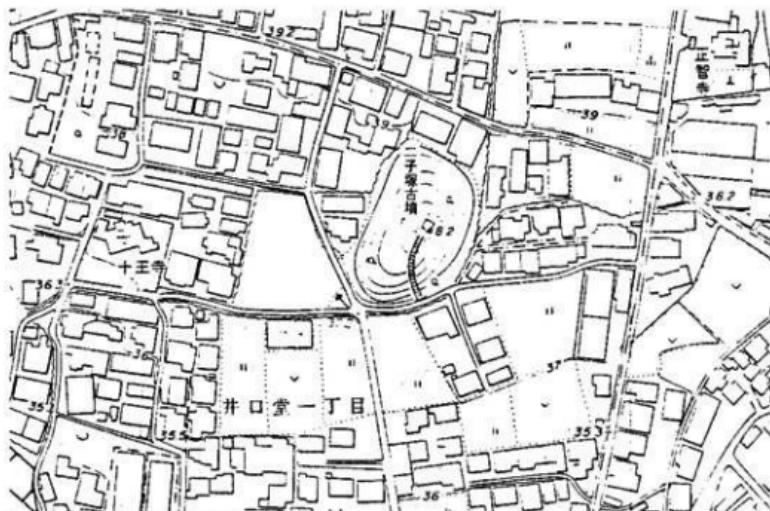
本墳は現在、採土や自然崩壊によって著しく変形し、また2基の横穴式石室のうち南側の石室は天井石が全て落出し、北側の石室は奥壁と思われる石材が残存し周辺には石材が散乱しているという、実に無様な状況を示している。

今回は、本墳の重要性と保護対策の緊急性に鑑み、墳丘の形態と残存状況、及び外部施設等の基礎資料を得るために実施した第1次調査である。

註1) 梅原末治「攝津の古墳」「考古学雑誌」第4巻第8号 1914年

宮田好久「池田市史」史料編1 1967年

(2) 田中晋作「各地域における最後の前方後円墳 西日本Ⅱ 大阪府北部・攝津地方」『古代学研究』104号 1984年
橋高和明「源始・古代の池田」、池田市立池田中学校地歴部 1985年



第1図 調査地点位置図

II. 古墳と周辺の遺跡

池田市の中央部に位置する北摺山地の南麓は複合扇状地である五月山丘陵が発達し、更に南方は猪名川流域の沖積平野を眼下にして舌状に延びる通称豊中台地が続いている。この五月山丘陵はいくつかの小丘陵に派生しながら緩傾斜をみており、二子塚古墳はその南部に位置し、南方及び西方の平野を望む標高43m～45mの丘陵端部に築造されている。

五月山丘陵は池田市域において最も古墳が集中する地域であり、まず前期古墳として、丘陵鞍部に南面して築造された前方後円墳の池田茶臼山古墳が、また五月山の中腹であるが画文帶神獸鏡が出土した円墳の姫三堂古墳がみられる。中期古墳は当丘陵には存在せず、続く後期に至ると主として丘陵末端部に横穴式石室を主体部とする小規模古墳が築造されるが、いわゆる群集墳としてではなく、単独、或いは二~三基を一単位として点在しており、西方の長尾山丘



1. 木部1号墳	2. 木部2号墳	3. 木部桃山古墳	4. 紅葉古墳
5. 塚三堂古墳	6. 錦三愛南古墳	7. 池田茶臼山古墳	8. 城山古墳
9. 五月ヶ丘古墳	10. 鈴鹿古墳	11. 二子塚古墳	12. 善海1号墳
13. 善海2号墳	14. 野田原古墳	15. 低原古墳	16. 石橋吉墳
17. 大谷環古墳	18. 菊荷社古墳	19. 桜古墳	20. 中尾堀古墳
21. 桜井谷古窓跡群	A. 木部遺跡	B. 爰宕神社遺跡	C. 五月山公園遺跡
D. 伊豆那神社參道遺跡	E. 濱田城跡	F. 鈴塚北遺跡	G. 鈴塚南遺跡
H. 宇保遺跡	I. 門田遺跡	J. 神田北遺跡	K. 夏湖池遺跡
L. 京中路跡	M. 石積廢寺	N. 新宿荷西遺跡	

第2図 周辺遺跡分布図

陵や千里丘陵北部とは対照的な方を示している。但し、こうした小規模古墳の中にあって当古墳や上円下方墳で大型の横穴式石室を主体とする鉢塚古墳のような大型古墳の存在は、その築造の背景を他と異にするものと考えられ、畿内中枢部との関係が想定される。

一方、古墳以外の遺跡は現在までにその性格の明らかにされたものは少なく、また範囲や時代も詳らかにできないという状況にある。しかしこの中で伊居太神社参道遺跡は旧石器時代から縄文時代に亘る石器が、京中遺跡や池田城内の横枕遺跡でも縄文時代の石器、土器が出土しており、古くから生活の場となっていたことが判明している。弥生時代に至ると池田城内の城山遺跡や夏湖池遺跡が、五月山山頂には高地性集落と目される愛宕神社遺跡が営まれている。また五月山西麓の木部遺跡は前期より営まれており、猪名川流域における弥生時代の換点的な集落の可能性がある。古墳時代の集落跡は少なく、将来に発見されるものと思われるが、現在のところ宮の前遺跡、神田北遺跡、豊島南遺跡など五月山丘陵より南方の台地上で認められている。歴史時代以降では、五月山丘陵の北部に、伽藍配置は判断としてないが白鳳時代の石積廐守が創建され、また西方には池田の町の形成に大きな關わりをもつ中世城郭の池田城が築造される。

III. 調査の概要

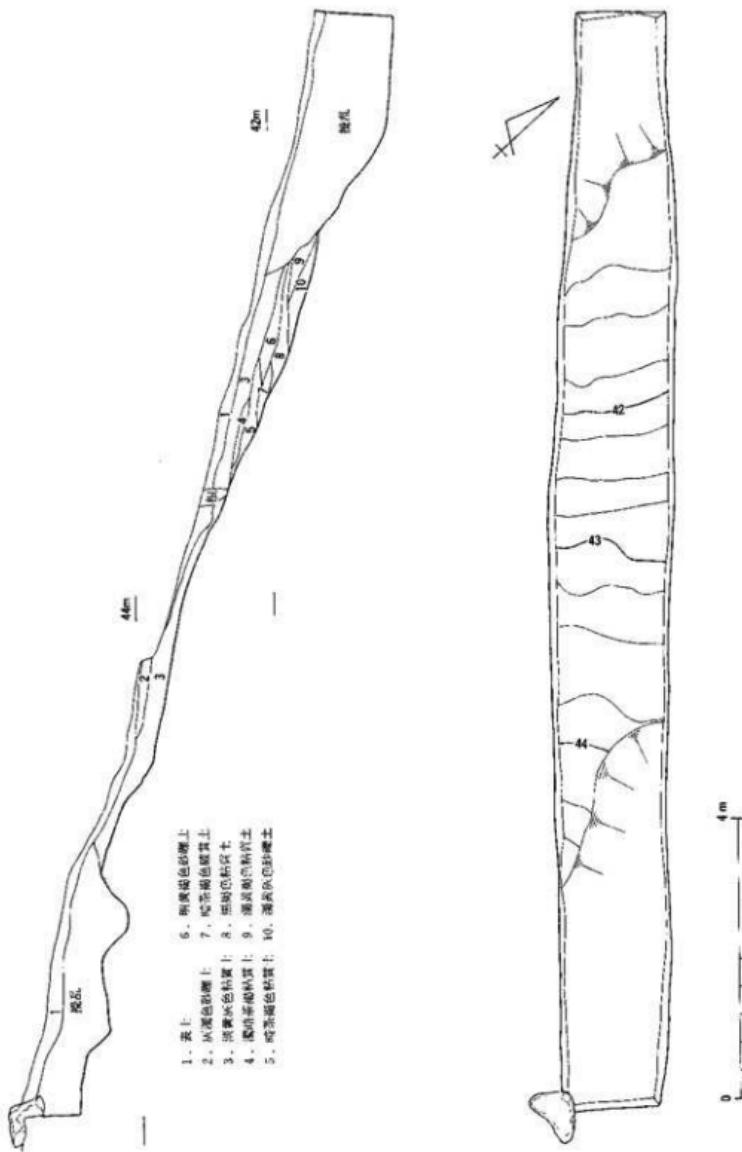
既述のように今回の調査は墳丘形態の把握と外部施設の有無を確認する事に主眼をおいたが現状の墳丘にできるだけ手を付かない方針をとるとともに樹木が多数生い繁っているため、トレンチ4本に留める事とした。

墳丘トレンチは、遺存状態の良好と思われた墳丘の北側に第1トレンチ、これより東へ90度の角度に第2トレンチ、両トレンチの中間に45度の角度で第3トレンチを設定した。但し、上述のように多数の樹木の関係で第1・2トレンチを墳丘の主軸と思われる方向に平行域いは直行させて設定すべきであったが、若干移動せざるを得なかった。

第1トレンチ（第3図）

墳丘西北側の裾部、段築成の状態を把握するために幅1.5m、長さ16mのトレンチを設定した。断面観察によると、トレンチ西側では腐植土と地山出土の互層を形成しており、封土が長年に亘って徐々に流出していった事を窺わせる。トレンチ西端は近世以降の擾乱があり、瓦、染付碗、土師器を含んでいた。

地山面はトレンチ西側半分で約20度の斜面となり、中間やや東よりの43.5mレベルで幅1.5mの緩斜面を形成し、更に約25度の傾向をもって立ち上がっている。恐らく緩斜面から上方へ立ち上がる部分が墳丘裾になるものと考えられるが、この立ち上がる部分は擾乱によって僅か2mしか残存しておらず、このトレンチにおいては墳丘裾の方向を把握することができなかつ

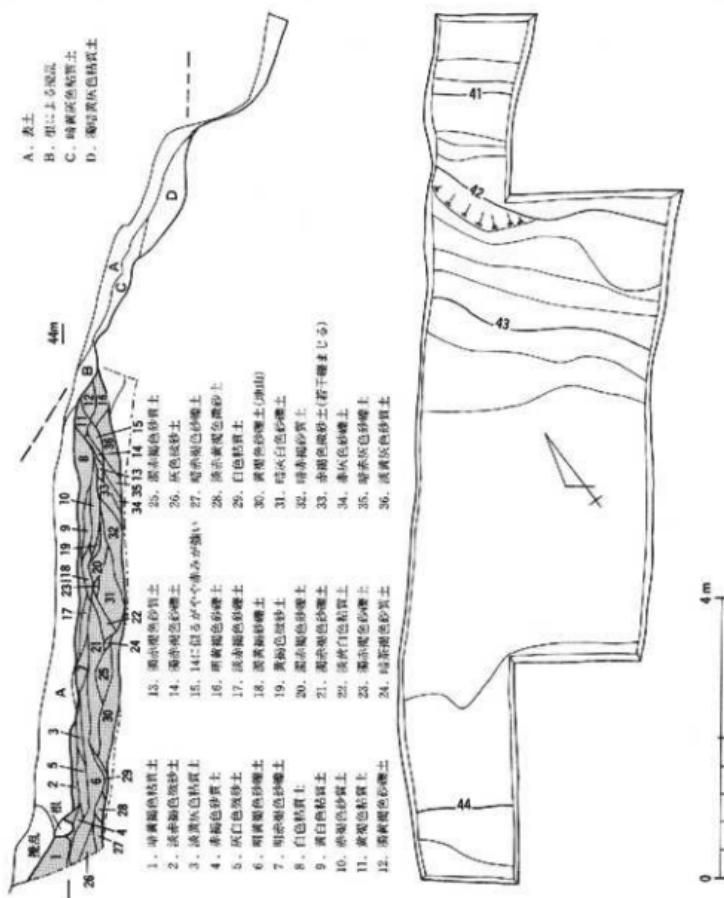


第3図 第1トレンチ平・断面図

た。尚、この擾乱内より須恵器の他、瀬戸・美濃窯の天目茶碗、備前窯甕、瓦、焰硝など中世から近世に亘る土器が多数出土した。

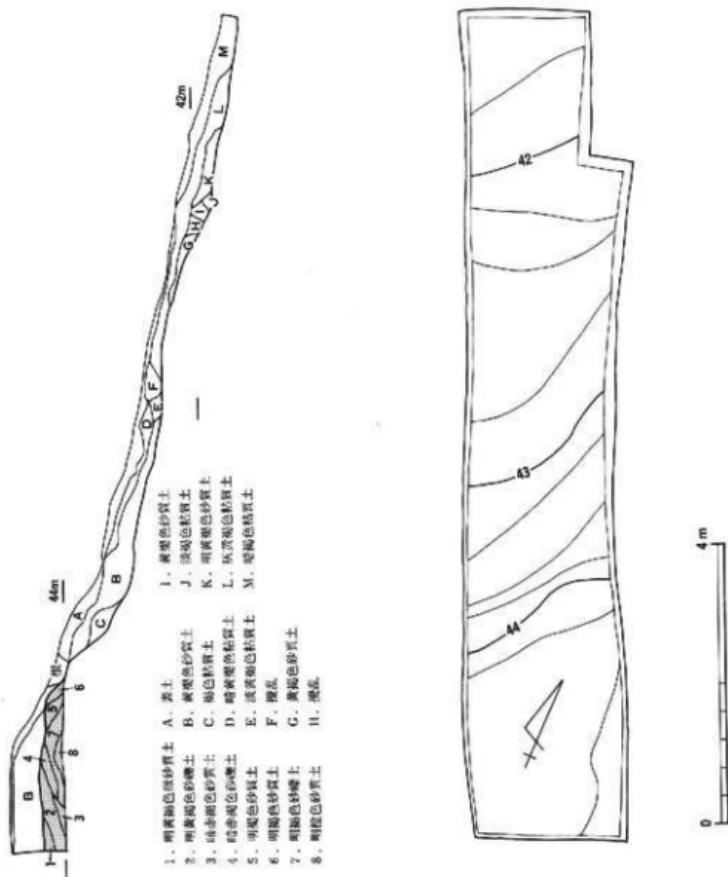
第2トレンチ（第4図）

墳丘北東側に第1トレンチより90度の方向に設定したトレンチで、当初は幅2m、長さ12mの規模とし、後に東へ2m拡張を行なった。



第4図 第2トレンチ平・断面図

調査の結果、43m レベルで現存幅 1 m の平坦部とこれより約40度立ち上がる斜面部を検出し、この箇所が墳丘裾と考えられる。斜面部は N-50°-W の方向にほぼ直線に走行するが、東側は削られ、また平坦部より東北側も著しく削り取られている。検出した斜面部上部には盛土が認められたが、検出時には封土であるか否か判断できなかったため、西壁に沿って幅30cmで断ち割りを行った。断ち割り後の断面観察によると、何れも30~50cm程の細かい層による盛土である事が判明したが、残存する厚土は60cmを測り上部を著しく削平されている。盛土は地山削り出しによって墳丘部を形成した後に施され、盛土にあたってその流出を防ぐため先端部を若干



第5図 第3トレンチ平・断面図

弯曲させている。盛土の状況をみると、外部から墳丘中央部へ内方に傾斜させた後に平坦にする方法を示しており、基本的に傾斜させる層には粘質土か微砂土を、その他は主として砂礫土か砂質土を用いている。こうした土質の区別は、盛土を施していく過程での土の流出を防ぐ工夫であるものと考えられる。

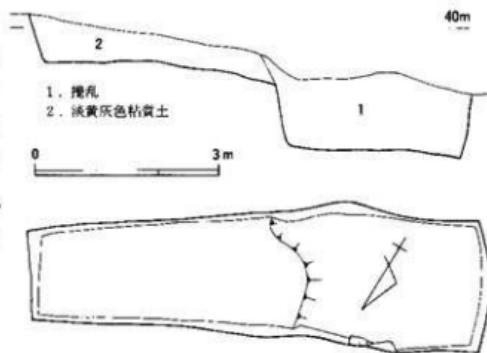
第3トレンチ（第5図）

第1トレンチで若干残存している墳丘裾と思われる箇所の方向を把握するため、第1トレンチより45度の位置に幅2m、長さ12mで設定したトレンチである。このトレンチでは、ほぼ43mのレベルで若干の平坦面があり、第1トレンチで検出した斜面と対応するようにこれより約20度の角度で立ち上がる斜面を検出した。このことから、第1、3トレンチ検出の斜面は直線的に走行することが判明し、恐らく前方部の北西側に当たる墳丘裾であるものと推定される。

尚、第2トレンチと同様にこのトレンチでも斜面上部に厚さ35cm程の盛土が残存していた。断ち割りによって土層断面を観察すると、地山を整形して墳丘部を形成してその上部は盛土を施しているが、第2トレンチのように盛土にあたってその上面を弯曲させる工夫をせず、水平にした後に施している。盛土の層は幅10cm程度で、墳丘中央部へ傾斜させているが、調査範囲が狭いため、七質を区別して盛土を施しているのか否か判断できなかった。

第4トレンチ（第6図）

古墳の南側に見られる平坦面に設定した2m×7mのトレンチで、墳丘南側の範囲、古墳以外の遺構の有無確認を目的としたものである。土層は地表より60cmまでは腐植土が堆積し、その下はすぐ地山となる。しかしトレンチ東側半分は、後世の擾乱によって著しく破壊され、瓦、コンクリートを含んでいた。尚、後世の破壊を免れている箇所で遺構は認められなかった。



第6図 第4トレンチ平・断面図

IV. 石室

二予塚に構築された三基の石室のうち、北石室は既述のように後世の破壊によって旧状を保っていないが、天井石と思われる一枚の石材は原位置にあるものと考えられ、玄室の一部は残存している可能性がある。また、ここに残存する二枚の天井石の位置関係より推して、南北の石室は概ね同一の主軸になるものと考えられる。

南石室は中軸線を E.-35°—S に据る両袖式の横穴式石室である。玄室は奥壁の一部を除いてほぼ完存しているが、羨道部は側壁上部と天井石の一部が失なわれている。現状では全長 6.72 m、玄室長 4.50 m、奥壁幅 1.54 m、玄門部での幅 1.56 m、奥壁の高さ 1.68 m、羨道長 2.22 m、玄門部付近で 96 cm、入口側で 1.02 m を測ることができる。玄室の平面形態は上記の数値でも判るように長さに対して幅の小さい狭長なものである。

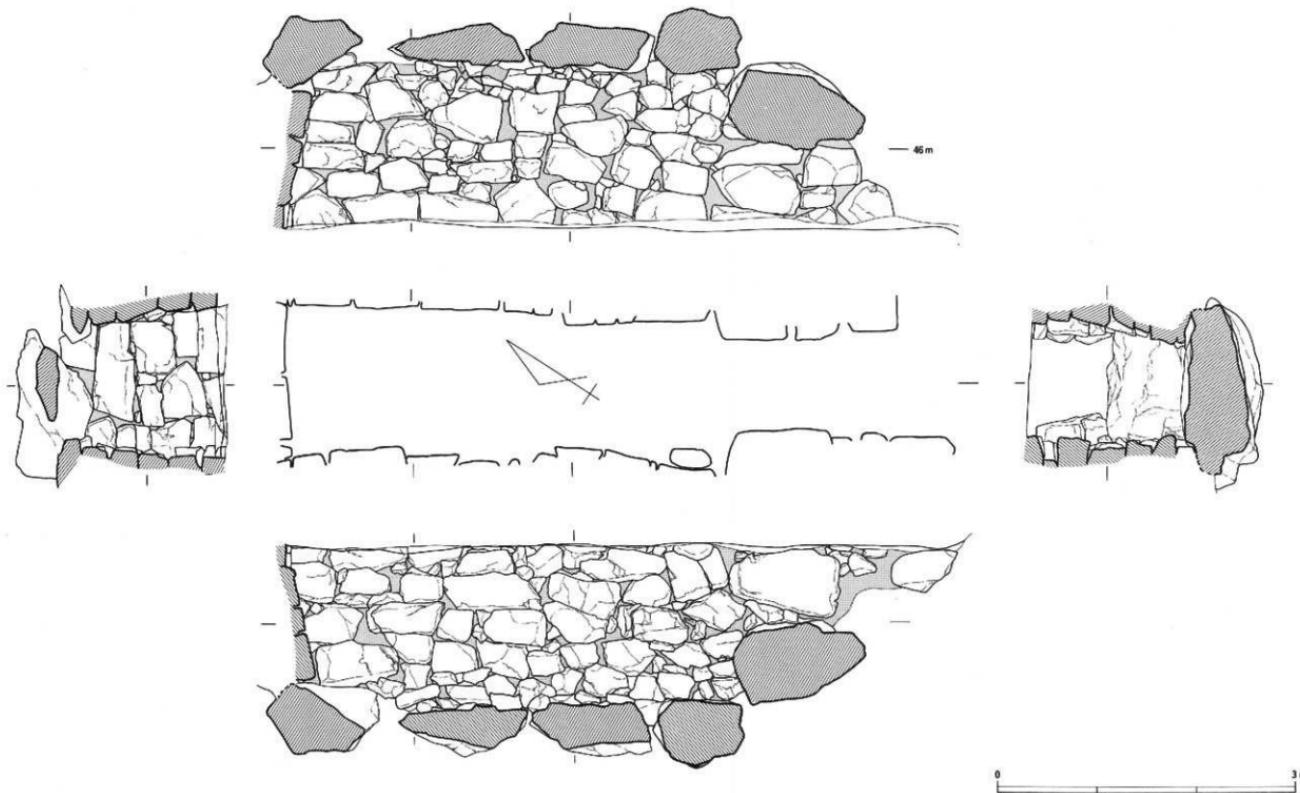
石室の立地は、すぐ南側の崖面の土層観察から地山直上に構築されており、石室の周囲は全て盛上がりなされている。

石室の構築は、石積みの状況からまず奥壁三段まで鉛形或いはそれに近い石材を垂直方向より石室内方へ約 20 度の持ち送りをもって横積みにし、この奥壁を挟むように若干持ち送りながら同じレベルまで側壁及び羨道側壁を積み上げている。羨道部にはこの後、見上石を兼ねる天井石が架構されており、奥壁の最初の積み上げレベルによって羨道部高が決定された事が窺われる。次に羨道天井を架構した後、この高さと同じレベルまで奥壁及び側壁が積み上げられているが、最初の手順のように奥壁を両側が挟むという関係は見られず、互いに石材隅部を接して積み上げられている。

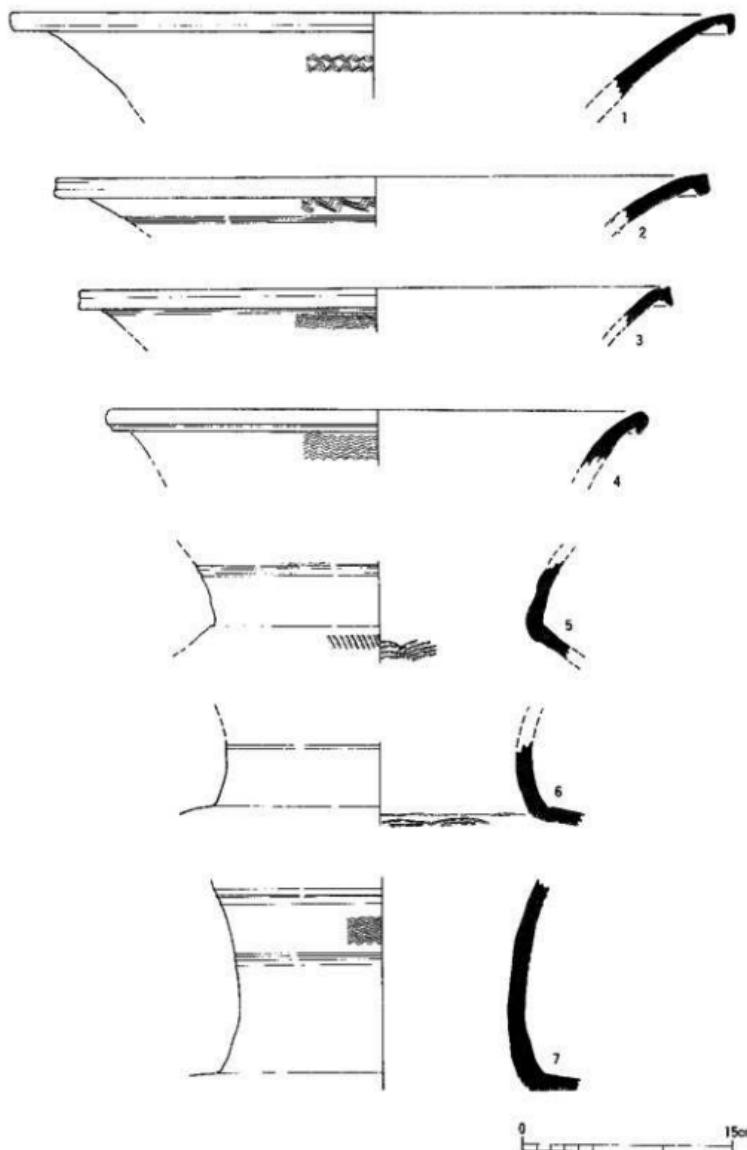
使用されている石材については、奥壁では自然石を加工した矩形で平坦面をもつ石材を横積みしているが、側壁は奥壁側と玄門側とでは石材及びその積み方が異なり、奥壁側は奥壁と同様の石材を用いて横積みし、玄門側では自然石を用い比較的乱雑に積み上げられている。側壁上部の天井石に接する部分では小石を用いて充填する手法をとっており、天井石を水平に架構するため、側壁の高さを調整したものと考えられる。但し、奥壁には小石を用いて高さを調節した箇所が見られず、玄室の高さは奥壁の高さ及び見上石の厚さによって決定された事が窺われる。

天井石は 4 枚で構成されるが、現状は奥壁が一部失なわれ奥壁側の天井石が落ち込んでいる。また各天井石の間には大きな空間が認められ、本来天井石の空隙にあった石材がかなり失われている。

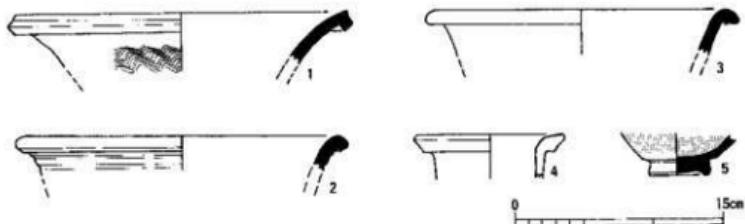
尚、石室は古くから開口していたためか、陶器片やガラス片が多数認められ、後世の擾乱が盜掘が甚だしかったことを予想させる。



第7図 南石室実測図



第8図 出土遺物実測図



第9図 出土遺物実測図

V. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物の大半は腐植土及び擾乱内の中世～近世のもので、古墳に伴う遺物は擾乱内や墳丘流水土より出土した若干の須恵器のみである。これらは全て細片化しており全体を窺える資料は一点もない。尚、調査開始時に墳丘盛土内から弥生土器を一点採集した。

須恵器（第8図、第9図1～3）

器種は全て甕で、口径22.6cmのものから52cmのものまであり、口縁端部の形態も、垂下させるもの、突帶状の貼り付けを行うもの、外方へひねり出すものなどバラエティーに富んでいる。口縁部外面には比較的丁寧な波状文を施し、また、沈線を巡らすものもみられる。肩部から頸部にかけて残存するものについては、頸部へほぼ直角に屈曲し、なだらかに口縁部となる形状を示しており、外面には一条ないし二条の沈線を施すものや、その間に波状文を施すものがある。また、進存度の良好なものをみると肩部外面には縱方向の平行タタキ、内面には同心円タタキが観察される。出土した須恵器は全て堅緻に焼成され、暗青灰色を呈している。

弥生土器（第9図、4）

墳丘南東部盛土内より出土したもので、畿内第V様式に比定される直口壺の口縁部である。口縁部は推定径11cmを測り、端部は外方へ屈曲させ外面に幅1.2cmの面を有している。内外面とも風化が著しく調整は不明である。胎土には石英、チャート等の粒子を少量含んでおり、在地産のものと思われる。

陶器（第9図、5）

第1トレンチ東側擾乱内より出土した瀬戸・美濃窯と思われる天日茶碗である。高台は貼り付けによっており、丁寧なナデによって仕上げている。内面及び外面の下半まで茶黒色の釉を施している。

尚、図に掲げなかったが、他に丹波窯猪鉢、土師器皿、焙烙、瓦などが出土している。

IV. まとめ

Ⅲ章でも述べたように今回の調査は自然崩壊等に伴う緊急調査として実施したものであるが、墳丘の残存状態の把握を目的とし、また樹木が多数生い繁っていた事から、調査面積は小規模に留める事にした。それでも2・3の新しい知見が得られたので、以下簡単に整理しまとめにかえたい。

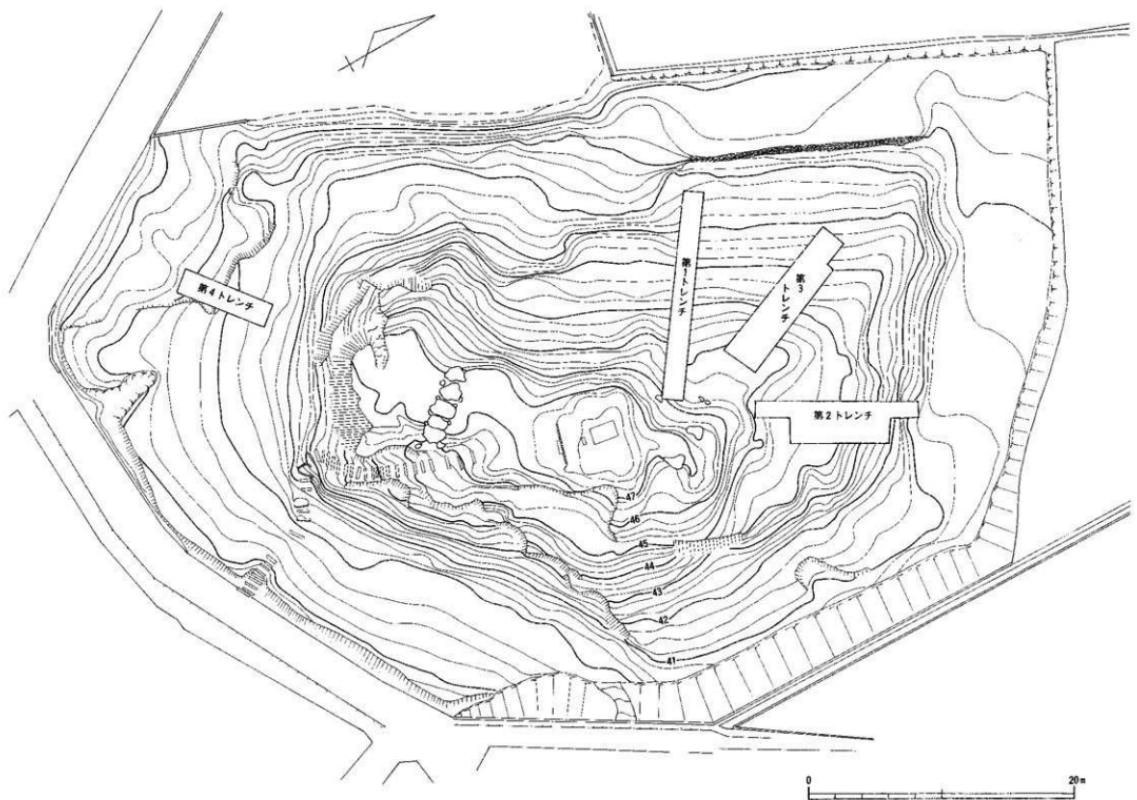
墳丘に設定したトレンチからは、従来より問題となっていた墳丘形態について十分に解決できる成果は得られなかったが、各トレンチにおいて検出した傾斜面はその上部に残存していた盛土から判断して墳丘裾と考えられ、その位置からみて前方部西側墳丘裾と前面裾に該当するものと推定される。とするならば、本墳は派生丘陵に長軸をもち、平野部に後円部を向ける全長45m前後の前方後円墳である蓋然性が高くなり、なおかつ、墳丘測量図からみて、前方部幅が後円部径を凌駕する典型的な後期古墳の特徴を示しているものと想定される。ただ、攝津地方において、殆どの前方後円墳が平野部に前方部を向けて築造されていることから、上記の想定に懸念があるが、同じ例として高槻市畠神車塚古墳⁽¹⁾を挙げることができ、あながら無理な想定とも思えない。但し、調査面積が限られることから、上記のことについては即断を避け今後の調査に委ねるべきと考える。

墳丘築造については、丘陵を削り出して墳形を整えその上部に盛土を施していることが判明したが、墳丘断面の所見及び墳丘南端崖面に認められる弥生時代の遺構レベルより、築造にあたって墳丘北側では削平を行って平坦面を形成しているものの、墳丘南側では削平を行わずそのまま盛土を施している。このことは、本墳の選地された丘陵が南方へ傾斜していることに起因すると思われ、築造の際、丘陵先端部を基準面とし、また石室の床面より推してその構築においてもこれを基準面としていることが窺える。よって、墳丘築造において選地した丘陵の地形的制約により削平と盛土を大規模に行わざるを得なかつたことが推定される。

古墳の築造年代については、副葬品等大半の遺物が失われており、また正確な墳丘形態も不明という状況にあって総合的な判断に欠けるものの、墳丘トレンチの擾乱内及び墳丘出土より出土した須恵器からある程度窺い知ることができる。ここで出土した須恵器は大小の甕だけでは器種が限定されるが、概ね桜井谷古窯跡編成のII型式2段階か3段階に比定されることから、⁽²⁾6世紀中葉と考えられる。但し、埋葬施設が複数あることからある程度の時期幅があるものと推定されるが、上記の年代をその上限とするならば、本墳を西摂地方東部において最も新しい前方後円墳として位置づけ得る可能性が生じてくる。

(1) 原口正二『高槻市史』第6卷考古編 高槻市役所 1977年

(2) 木下直『攝津桜井谷古窯跡群における須恵器編年』『桜井谷古窯跡群2-17室跡』少路窯跡調査報告 1982年



第10図 墓丘測量図



(1) 第1トレンチ(西から)



(2) 第2トレンチ(南から)



(3) 第3トレンチ盛土状況



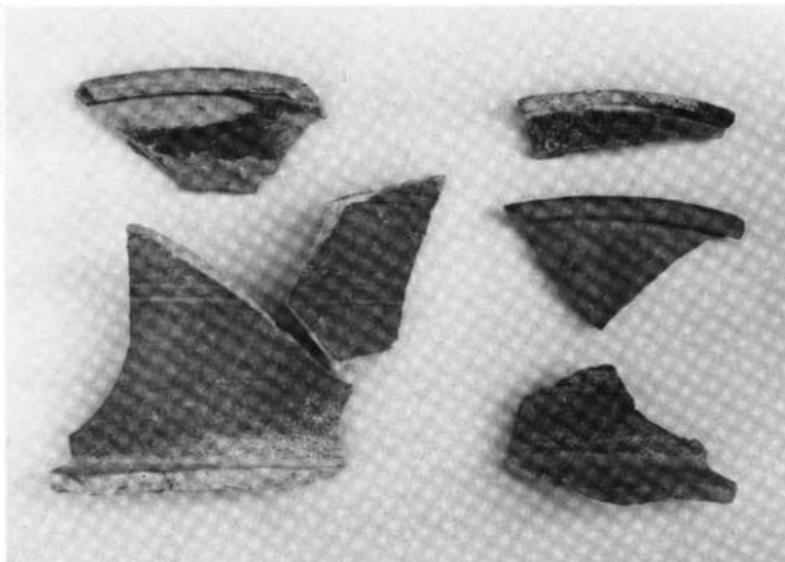
(4) 第3トレンチ(西北から)



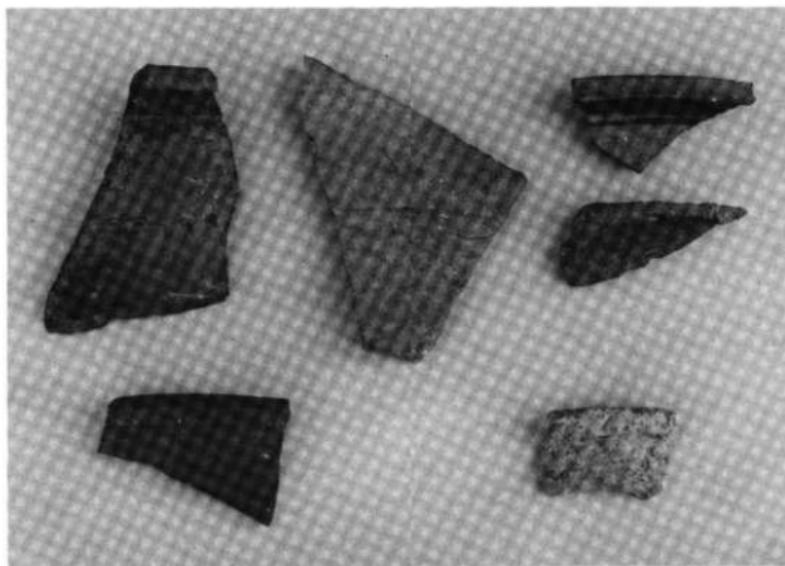
(5) 南石室奥壁



(6) 南石室玄門



(7) 出土遺物



(8) 出土遺物

宮の前遺跡発掘調査概要報告

例　　言

1. 本書は、池田市住吉2丁目101-3、右横4丁目32-39において実施した、個人・共同住宅及び個人住宅建築工事に先立つ発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査期間は、下記のとおりである。
 - 昭和61年7月12日～同年7月16日
 - 昭和61年12月20日（1日）
3. 発掘調査は、本市教育委員会社会教育部社会教育課社会教育係が実施し、田上雅則が現地を担当した。
4. 調査の進行にあたって、施主並びに近隣住民の方々に深甚なる御理解、御協力をいただいた。末筆ではありますが、深く感謝いたします。

目　　次

I. はじめに.....	25
II. 遺跡とその周辺.....	25
III. 86-1次調査地点.....	27
IV. 86-2次調査地点.....	32

I. はじめに

宮の前遺跡は、池田市石橋・住吉・豊中市螢池北町一帯に広がる弥生時代中期から近世に亘る複合遺跡である。当遺跡は古くから住宅地となり、遺構面が非常に浅い事から建替え及び新築によって破壊される危険性を孕んでいる。

今回の報告はこうした状況の中で、池田市住吉2丁目101-3、石橋4丁目32-39の二箇所において実施した発掘調査の概要報告である。

II. 遺跡とその周辺

宮の前遺跡は古猪名川によって形成された河岸段丘面に位置し、猪名川沖積平野を西に望む洪積台地に立地する。この洪積台地は沖積平野との比高差約10mを測り、東側に丘陵を控えるものの、その周囲には段丘崖をもち、平野部からは一種の独立丘陵としての様相を呈している。また台地上は比較的起伏が少なく居住地としての条件を備え、弥生時代から現代に至るまで累積と生活が営まれている場所である。

当遺跡は昭和初頭にその存在が確認され、近隣の川西市加茂遺跡とともに台地上に営まれる



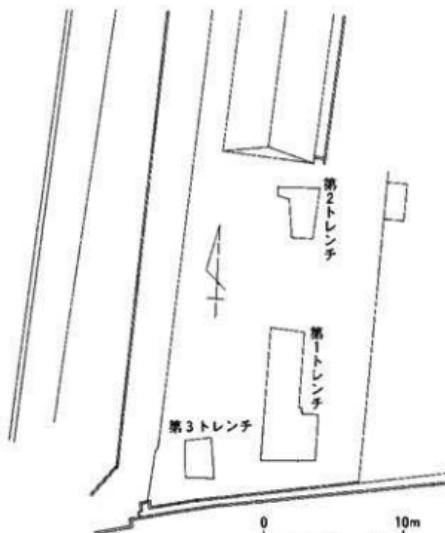
第1図 調査地点位置図



第2図 宮の前遺跡43年度調査造構配置図(池田市史より作図)

弥生時代の遺跡として注目されてきたものである。

しかし、本格的な調査が行なわれず、遺跡の性格や規模などの具体的な内容については不明のままであったが、昭和43年の中国自動車道建設に伴い 1,500m²と極めて広範囲に及ぶ調査が実施され、調査結果のうち弥生時代中期の方形周溝墓、土塙墓と竪穴式住居跡の検出は、墓域と居住地域の位置関係を一体的に把握できる稀有な例として、学界でも重要な遺跡として位置づけられる事になった。



第3図 トレンチ配置図

当遺跡の立地する台地は南へ舌状に張り出し、その沖積平野を望む西側線辺には、螢池西遺跡、箕輪遺跡、新免遺跡、山の上遺跡などの弥生時代から古墳時代を中心とする遺跡が所在している。また御神山古墳、新免上仙古墳、大石塚古墳、小石塚古墳などの前期古墳、中期古墳を中心とする桜塚古墳群が営まれ、当地域に政治的基盤が存在していた事を類推させる。一方、西に広がる沖積平野には縄文時代より多くの遺跡が所在し、特に弥生時代の撲点的集落とされる勝部遺跡や田能遺跡は学史的にもつとに著名な遺跡である。

上述のように、当地域は西浜平野東部において最も遺跡の集中する地域で

あり、その北辺に位置する宮の前遺跡についてその地理的な役割があらためて注目される。

III. 86-1 次調査地点

1. 調査の概要

調査地点は池田市住吉2丁目101-3に所在する。当初、敷地面積 359m²の範囲内にトレンチを三ヶ所設定し、調査の結果弥生時代の遺構を確認したため、特に遺構が顕著にみられた第1トレンチを拡張し、引き続き調査を行なった。

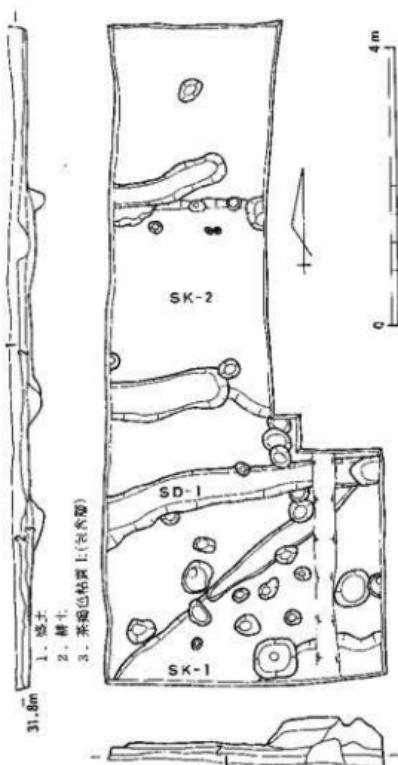
第1トレンチ（第4図）

敷地範囲の東南部に 2m × 2m のトレンチを設定し、検出遺構の状況に応じて東側、北側に拡張したものである。層序は基本的に4層からなる。このうち第1層は盛土、第2層は畑作に係る土壤であり、弥生時代中期の土器を若干含んでいた。第3層は茶褐色粘質土の包含層で、一部分しか残存しておらず、後世の削平が著しかった事を窺わせる。第4層は茶褐色粘質土の地山であり、以下報告する遺構はこの面で検出した。

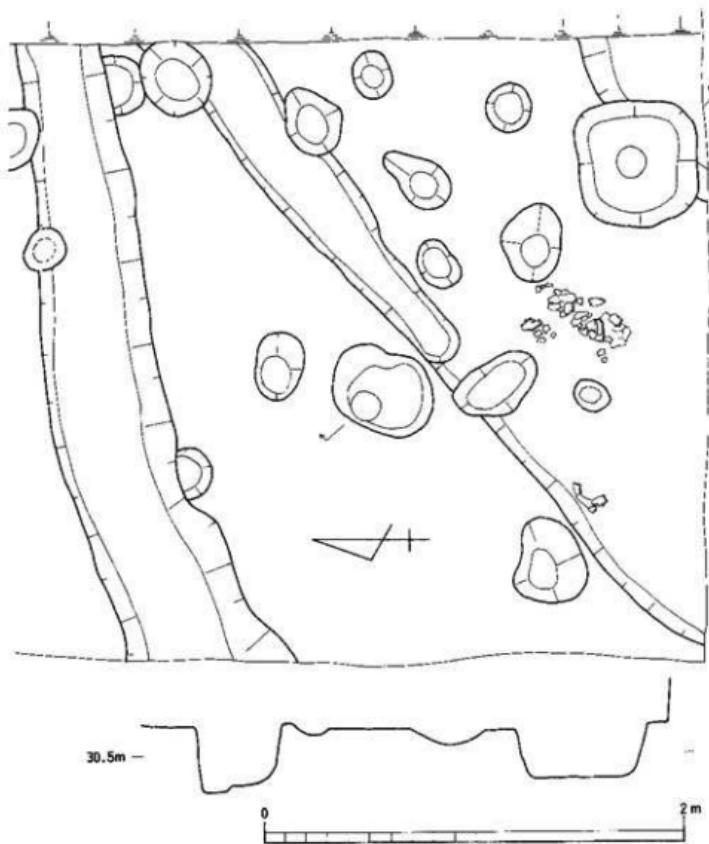
検出遺構は弥生時代中期の土塙（SK-2）、古墳時代後期の土塙（SK-1）、掘立柱建物跡（SB-1）などがある。

SK-2 幅3cm、深さ10cmの非常に浅い土塙である。中央部において直径40cmの範囲に広がる焼土が認められ何らかの作業場であった可能性がある。埋土内より弥生時代中期の土器片、サスカイト片が少量出土した。

SB-1 トレンチ南端部において、一部分検出した掘立柱建物跡である。遺構の大半は調査区外にのびるため規模については不明である。柱間は西北辺で2m、西南辺では1.7mを測る。西南辺の



第4図 第1トレンチ平面図



第5図 SK-1 土器出土状態図

柱穴より 1.2m の位置にも柱穴が存在しており、廬が付随していたものと考えられる。柱穴は偶丸方形、丸形、不定形を示し、また大きさも一定しない。深さは造構面より 25~40cm で、検出できた柱痕は何れも径 15cm を測る。尚、この掘立柱建物跡の西北辺の軸に平行して深さ 5cm の SK-1 を検出した。時期的な前後関係については判然としないが、SK-1 内に位置する柱穴が造構検出時に認められなかったため、掘立柱建物廃絶後落込み内に埋土が堆積したものと考えられる。但し、両者に時期的な前後関係が存在しない場合、もしくは掘立柱建物廃絶後形成された場合には、上述の事も起こりうるため、両者の関係については明らかにしえない。

尚、SK-1 内で古墳時代後期に比定される土師器、須恵器が出土している。

SD-1 ほぼ東西に走行し SB-1、SK-1 を切る溝で、幅40~65cm、深さ13~24cmを測り、断面形態は緩いU字形を有するものである。埋土内からの出土遺物はなく時期は不明である。

第2トレンチ（第6図）

敷地範囲の北側に設定した4m×2mのトレンチである。層序は第1トレンチを基本的に同じであるが、包含層は認められない。検出遺構はピット、溝がある。

SD-4 調査区外へ伸びるため規模は不明である。深さは25cmで溝底面の位置より推定すると1.5m程度になるものと考えられる。埋土内より弥生時代中期の土器が出土しており、或いは方形周溝壺の一部になるものと考えられる。

第3トレンチ（第7図）

敷地範囲の西南部に設定した2.5m×2mのトレンチである。層序は第1トレンチと基本的には同じであるが、包含層は認められなかった。検出遺構としてはピット溝がある。

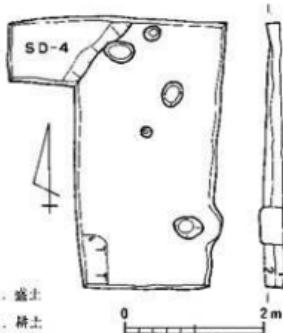
SD-5 ドレンチ北側において検出した溝で、北側は調査区域外になるため幅は不明である。また、西側は擾乱によって破壊されている。断面形態は緩いU字形を呈するものと思われ埋土内より弥生時代中期の土器が出土している。

2. 出土遺物（第8・9図）

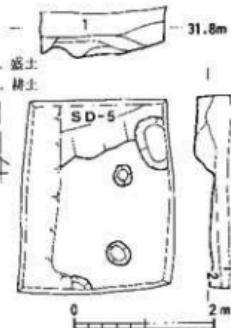
今回の調査では弥生時代中期と古墳時代後期の二時期の遺物が出土しており、そのうち弥生七器が大半を占めている。

弥生時代（第8図）

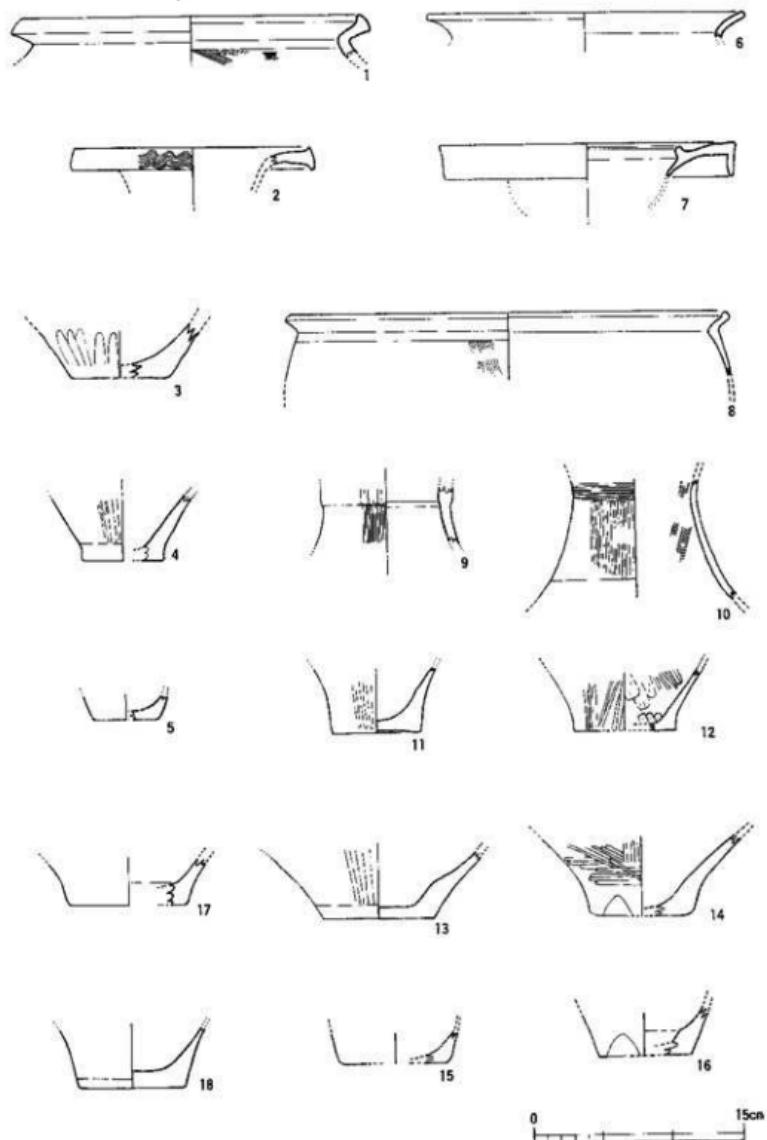
(1) は第1トレンチ SP-9 で、推定口径24.1cmを測る壺の口縁部で、頸部より急角度で外反し、口縁部先端で上下方向に肥厚する。体部内面にハケが施され、口縁部内外面にはナデが施される。(2) は第1トレンチ SP-14 で、広口壺の口縁部である。頸部から外反するU



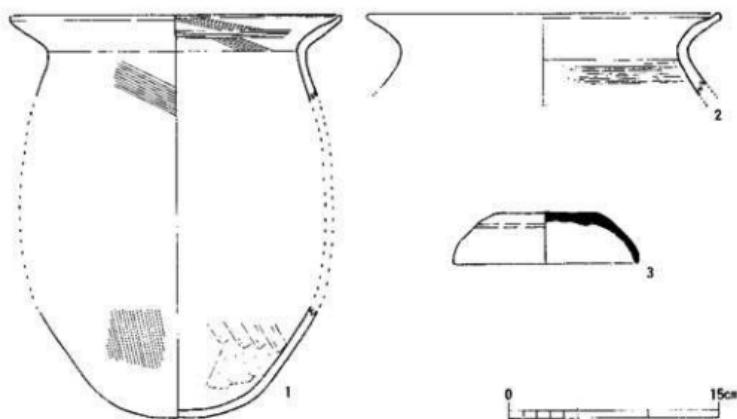
第6図 第2トレンチ平面図



第7図 第3トレンチ平面図



第8図 出土遺物実測図



第9図 出土遺物実測図

縁部をもち、端部は上下方向につまみ上げ面をもつ。端部外面は櫛描波状文が施され、口縁部の内外面はヨコナデが施される。(3～5)は第1トレンチSK-2で、すべて底部破片であるが器種は不明である。(3)は底部内面付近に指圧痕が認められる。体部外面にはヘラミガキが施される。(4)は体部外面にヘラミガキが縱方向に施されているが、底部外面では横方向のナデによって消去されている。尚、底部外面はナデによって若干内反氣味である。(6～16)は第2トレンチSD-4で、(6)は推定口径23.2cmを測る甌の口縁部である。(7)は推定口径10cmの高杯である。全面に風化が激しく調整は不明である。体部より外反していく口縁端部は下方に垂下させている。(8)は推定口径31.6cmを測る口縁部であるが器種は不明である。口縁端部には上方へのつまみ上げが認められる。体部外面にはハケが施されている。(9)は頸部に指頭圧痕突起文を巡らす広口甌と思われる。調整は外面にハケが施されているが内面は風化のため不明である。(10)は壺の頸部である。外面は縱方向にハケが施された後に6条の櫛描沈線が施されており、下部においては横方向にナデが施されてハケメが消去されている。(11・12)は底部破片であるが器種は不明である。外面は縦方向にヘラミガキが施されており底部付近にまで及んでいる。内面はナデが施されている。(13)は平底の底部破片であるが器種は不明である。外面には縦方向の荒いナデが底部付近には丁寧なナデが施され、さらに底部において横方向のナデが施される。内面にもナデが施されている。(14)は平底の底部破片であるが器種は不明である。外面横方向にヘラミガキが施された後に斜め上方に向けてヘラミガキが施される。内面にはナデが施され、底部付近に指圧痕が認められる。(15)は平底の底部破片であるが器種は不明である。内面にナデが認められる。(16)は平底の底部破片

であるが器種は不明である。外面の底部付近に指圧痕を認めるが、他は風化が激しく不明である。胎土が荒く、風化により内面調整も不明である。(17)は第3トレンチSP-2で、胎土が荒く内外面ともに風化により調整は不明である。(18)は表面採集した半底の底部破片である内面にはナデが施されている。底部外面付近には横方向の丁寧なナデが施される。

古墳時代(第9図)

(1~3)は第1トレンチSK-1で、(1)は推定口径25.6cmを測る長胴の壺である。口縁部内面は斜方向のハケが施された後に横方向のハケが施される。体部屈曲部より下方はヨコナデによりハケメが消去されている。さらに底部内面には斜方向にヘラケズリが施される。(2)は推定口径24.8cmを測る壺の口縁部で(1)と同形式のものと思われる。体部内面にはケズリがみられる。口縁部の外面にはナデが施されている。(3)は推定口径12.8cmを測る須恵器の杯蓋である。大井部から口縁部にかけてはなだらかなカーブを描き、口縁部は丸く仕上げている。天井部外面には弓まで回転ヘラケズリ調整がみられる。

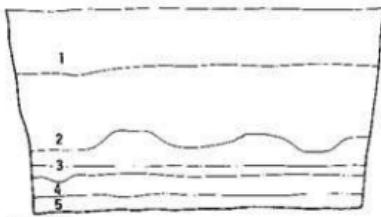
IV 86-2次調査地点

1. 調査の概要

調査地点は池田市石橋4丁目32-39にあたり、個人住宅改築の事前調査として遺構の確認と遺構面までの深さを把握する事を目的としたものである。住宅建築工事の関係から時間的に制約があったため、敷地範囲内に2.5m×1.5mのトレンチを1個所設定して調査を行った。

トレンチ断面観察による層序は次の通りである。

層序は7層からなり。地表面から40cmは盛土である。第2層は淡青灰色砂質土で厚さ50~60cmを測る。第3層は厚さ10~20cmの水田耕作上、第4層はその床土で厚さ5~10cmを測る。第5層は厚さ12~15cmを測る黒茶色粘質土でこの層より中世に比定される土器が若干出土した。



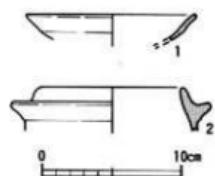
1. 盛土
2. 淡青灰色砂質土
3. 黒茶色粘質土(耕作土)
4. 黒茶色粘質土
5. 黑茶色粘質土(土器包含層)
6. 暗黄褐色粘質土

第10図 トレンチ断面図

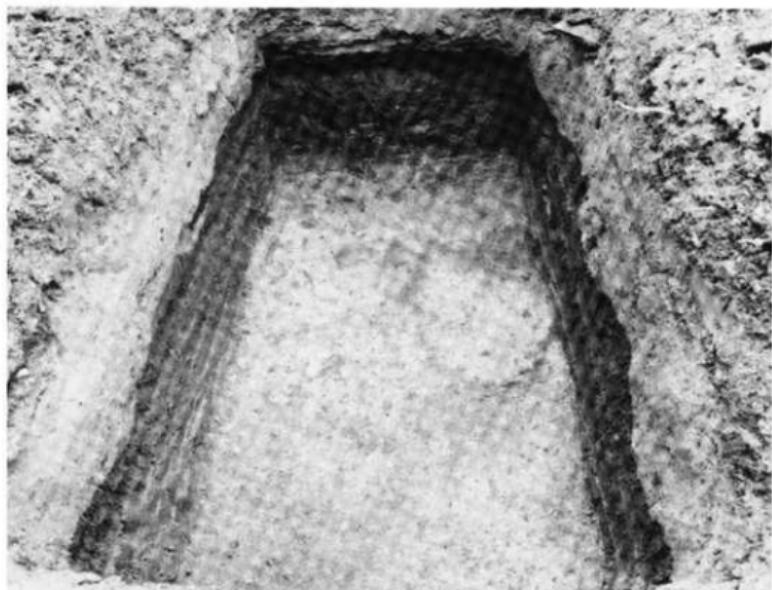
第6層は暗黄茶色粘質土で厚さ10cmを測る。この層から遺物は認められない。第7層は黄褐色粘質土の地山であり、この上面で遺構は認められたかった。

出土遺物は全て小破片で、図示し得たのは二点のみである。(1)は推定口径14cmを測る和泉型瓦器碗で、底部を欠く。内外面とも風化が激しく調整は観察できない。(2)は推定口径10.4cmを測る瓦質の羽釜である。内外面とも風化が激しく調整は観

察できない。口径が小さいことから足釜の口縁部と思われる。



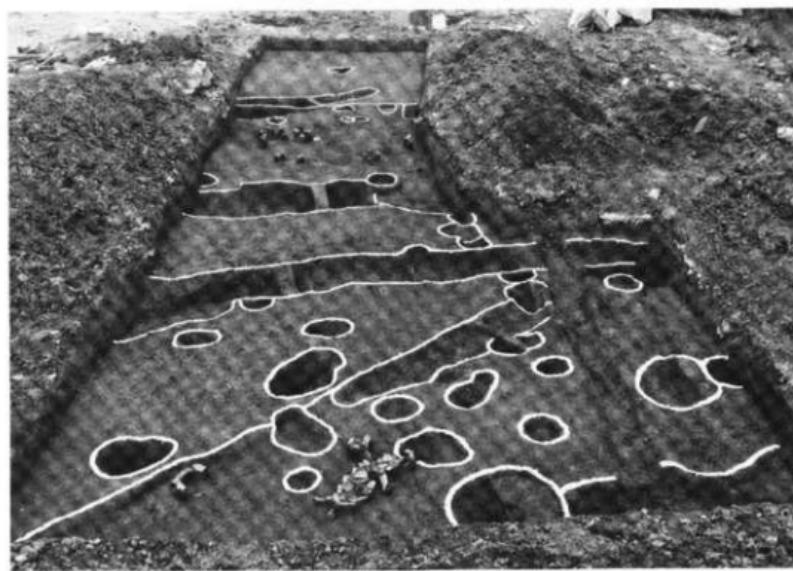
第11図 出土遺物実測図



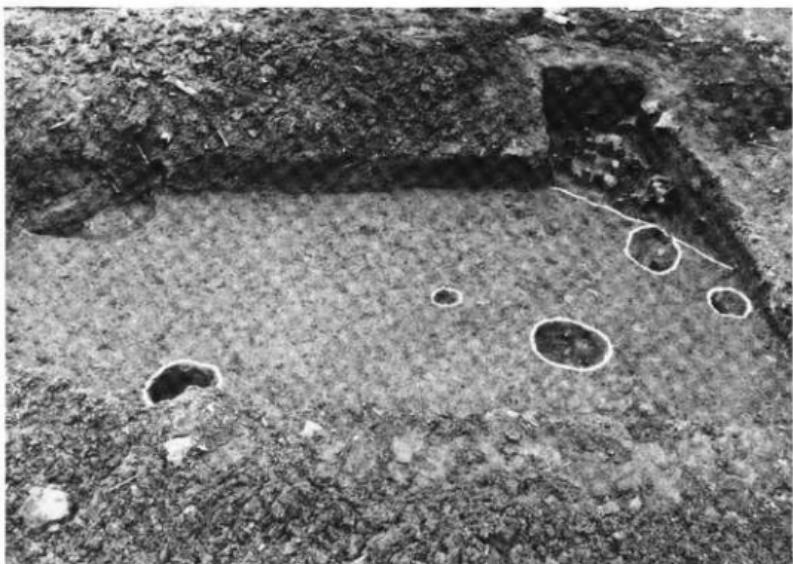
第12図 トレンチ(北から)



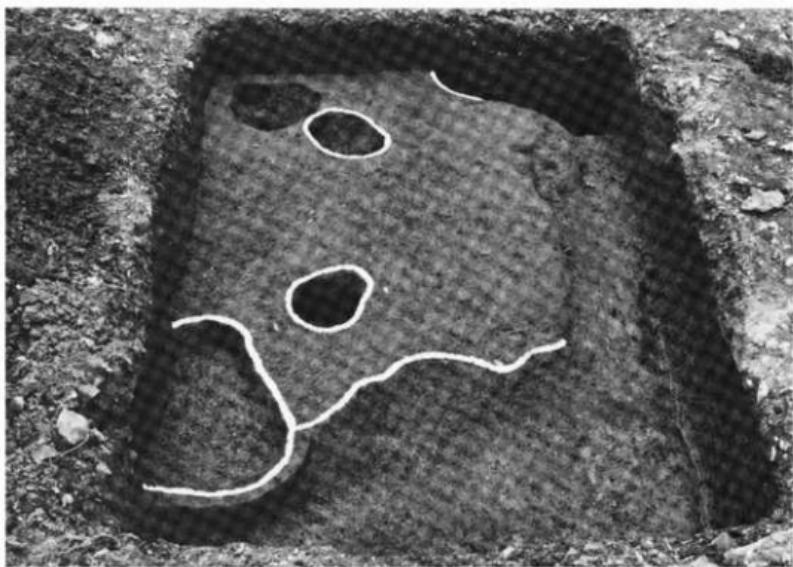
(1) 調査地全景



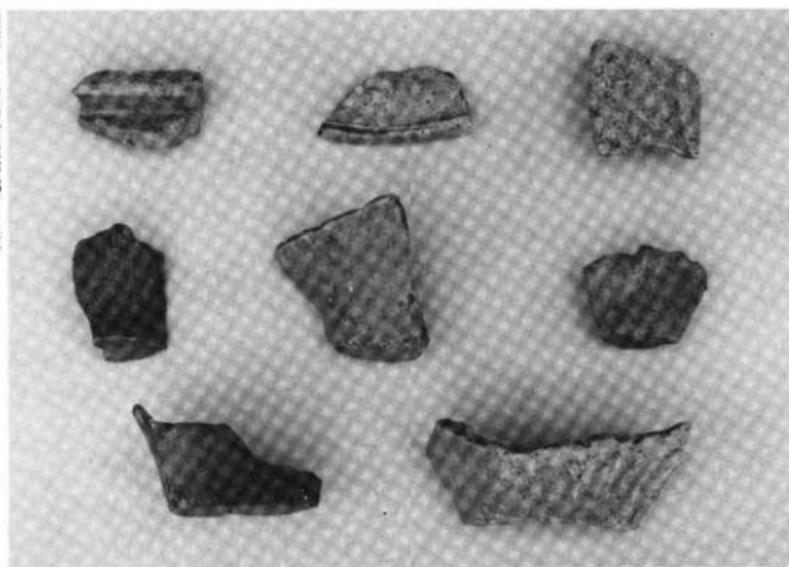
(2) 第1トレンチ(南から)



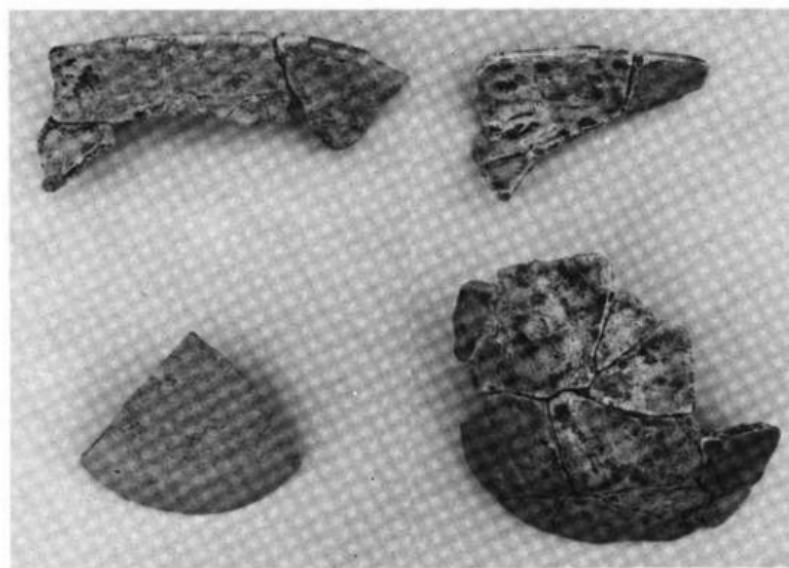
(3) 第2トレンチ



(4) 第3トレンチ



(5) 出土遺物



(6) 出土遺物

池田城跡86—1次発掘調査概要報告

例　　言

1. 本書は、池田市栄本町3133において実施した、店舗付個人住宅改築工事に伴う発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は、昭和61年8月25日から同年9月4日にかけて実施した。
3. 発掘調査は本市教育委員会社会教育部社会教育課社会教育係が実施し、田上雅則が現地を担当した。
4. 調査の進行にあたって、施主並びに近隣住民の方々に深甚なる御理解、御協力をいただいた。末筆ではありますが、深く感謝いたします。

目　　次

I. はじめに.....	39
II. 周辺の遺跡.....	39
III. 池田城の概要.....	40
IV. 調査の概要.....	42
V. 出土遺物.....	45

I. はじめに

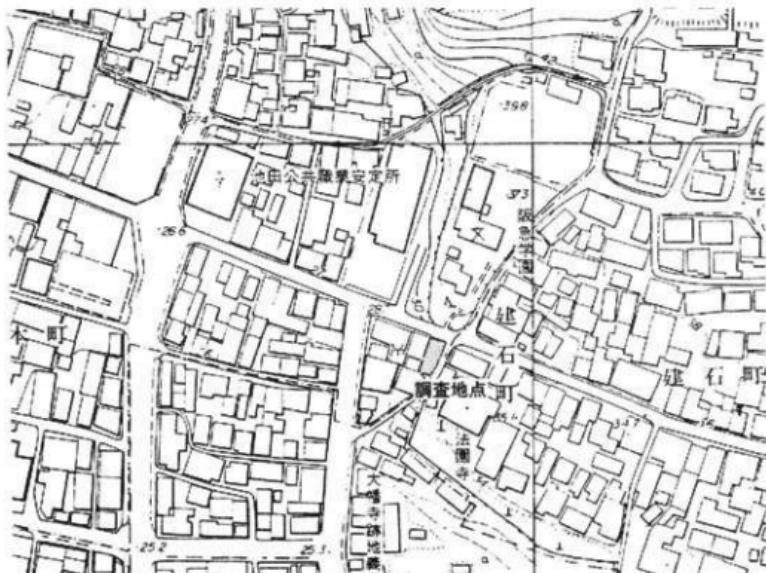
池田城は現在の池田市建石町、栄木町、城山町に広がる中世から戦国時代の城郭跡である。

この地域は古くから住宅地となり、近年その建替えや新築が多くなっている。この池田城は遺構面が比較的浅いことから、木造住宅の基礎工事でも十分破壊される危険性をもっている。

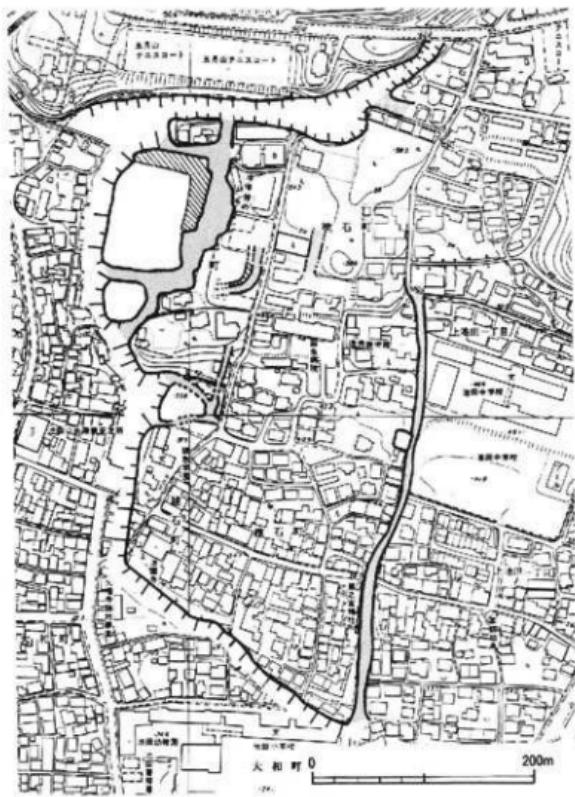
今回は、こうした状況の中で池田市栄木町3133において実施した住宅改築工事に伴う発掘調査の概要報告である。

II. 周辺の遺跡

池田市を大きく南北に二分する五月山の南麓には比較的起伏の少ない小丘陵や台地が発達し多くの遺跡が分布している。古くは旧石器時代から縄文時代の石器が採集された伊居太神社参道遺跡や縄文時代中～後期の土器が採集された京中遺跡、また縄文時代晚期の土器が出土した池田城域内の横枕遺跡がある。弥生時代には、全国的にも著名な宮の前遺跡、五月山西麓に位置するが、弥生時代前期から営まれる本部遺跡、五月山頂上には高地性集落の愛宕神社遺跡がある。古墳時代になると、池田茶臼山古墳や姫三堂古墳などの前期古墳や鉢塚古墳や二子塚古



第1図 調査地点位置図



第2図 池田城城郭構造復元図(参考文献3)より、一部改変)

墳などの後期古墳が造営されるが中期古墳は当丘陵には存在せず、同じ猪名川流域にある伊丹市や豊中市と様相を異にしている。

池田城の築城される台地は現在までの発掘調査の所見から、上述の横枕遺跡や弥生時代後期の住居跡や古墳の存在していたことが判明しており、築城に伴う大土木工事によって多くの遺跡が破壊されていることを想像させる。

III. 池田城の概要

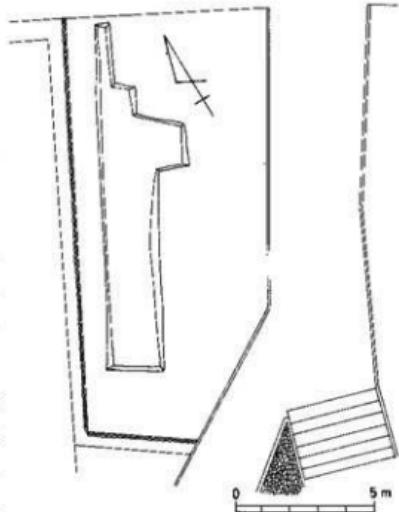
池田城は五月山より南方へ張り出した標高30~50mを測る台地に立地する、室町時代から戦

国時代に亘る平山城である。この台地からは旧池田村を眼下にでき、また大阪湾へ南流する猪名川、京と西国を結ぶ西国街道、大阪から能勢地方へ通じる能勢街道も…望でき、当時の交通の要衝に選ばれていた。

城域については推定であるが、東西約330m、南北550mを測り、北側は五月山より西流する枚ヶ谷川によって形成された開拓谷、西側及び南側には台地と平野部との境界にできた段丘崖、東側には南北に走行する谷が存在しており、これらを城の外郭施設としたものと推定される。城の構造については、現在、城の西北部に位置し大規模な空堀や土塁によって囲繞された本丸跡を残すのみで、大部分は宅地化されており明らかにできていない。

本丸跡では昭和43・44年に一部ではあるが発掘調査が行なわれ、礎石を作り建物跡や廻廊跡焼打ちされた事を証明する焼土層を検出し、全国的にみる遺存度の良好な空堀、土塁とをあわせ、学界でも重要な城郭跡として位置づけられる事となった。また、近年の発掘調査によって本丸跡の南100mの位置に手口門が存在する事や内堀の存在が確認されており、城の構造が徐々にではあるが解明できつつある。

この池田城は在地土豪であった池田氏の居館として營まれたもので、その勢力が増大するに伴い城郭として整備されていったものと想定される。池田氏の出自については不明な点が多いが、南北朝時代には池田の地に居館を構えていたものと考えられる。その後、応仁、文明の乱の頃には摂津守護細川氏の被官として領地を拡大するとともに、高利貸経営を行い莫大な財源を蓄え、当時の京都の貴族から「富貴榮華の家」「富貴無双」とうたわれるほどの富豪ぶりを見せた。また戦闘においても細川方（東軍）、或いは大内方（西軍）にと立場を変えながら参戦し、摂津における拠点として幾度かの落城を経験しながらも有力な地位を得、戦国人名へ近づいていった。しかし、永禄年間の織田信長による摂津入国に際し、当時の城主池田勝正は信長の手中に帰し、一時は和田氏、伊丹氏とともに三守護として所領を安堵されたものの、その頃から着実に勢力を伸ばしてきた家臣荒木村重によって城を奪われ、天正二年（1574年）村重が伊丹氏を倒して伊丹城へ入城した後、池田城は間もなく廃城してしまったようである。但し廃城した年代については



第3図 トレンチ配置図



第4図 トレンチ断面図

詳らかにされていない。

参考文献

- (1)今谷四「大阪府史」第4巻中世Ⅱ 1981年
- (2)角田義明「池田城」「日本城郭大系」12 大阪・兵庫 1981年
- (3)丸島重則「池田城跡発掘調査の概要」
「大阪府埋蔵文化財担当者研究会資料」1985年

IV. 調査の概要

調査地点は池田市栄本町3133に所在し、店舗付個人住宅の改築を契機として遺構の確認を目的とした試掘調査である。

当地点は池田城跡推定範囲の西南端に位置するため城の外部施設の存在が予想され、緊急発掘調査として実施したものである。

調査は敷地範囲内に 2 m × 13 m のトレンチを 1 本設定して行ない、トレンチ北側で石組状遺構を検出したため、一部東側に拡張した。

層序（第4図）

層序は基本的に 7 層からなる。地表下 60 cm までは現代の建築物に伴う盛土である。第 1 層から第 4 層までは近世～近代の建築に伴うよくしまった砂礫上の整地層で、礎石と考えられる河原石や掘り込みが認められた。これは、当調査地点の北側を東西に走行する道が近世池田村の主要街路として発達していた事を元禄10年の「池田村絵図」から読みとれる事から、恐らく街路に付随する建物と整地が長年繰り返された事を示しているものと思われる。また整地面が南へ緩傾斜しており、出土遺物も少量であったため、調査地点の南側には住居は建築されず、空間地として利用さ

れていたものと想定される。

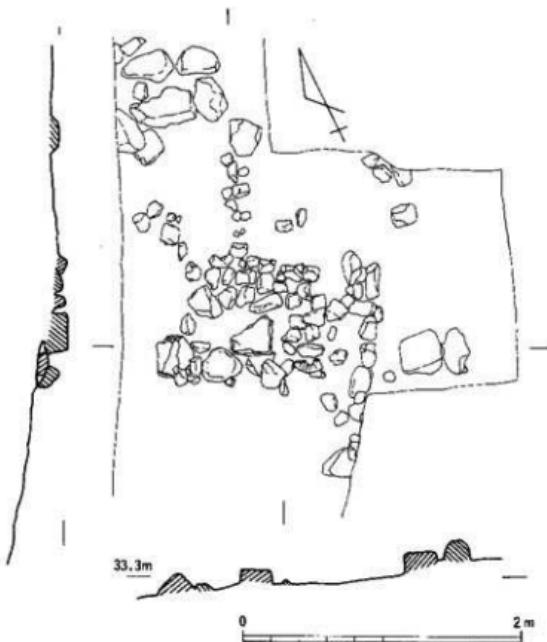
第6層は中世の遺物包含層で、この上面は上述の整理層と同様に南に緩傾斜しており、近世初頭の配石造構を検出した。また第6層上面には部分的ではあるが厚さ10~15cmの炭層を認めた。第7層は五月山丘陵を形成する洪積層で、水平面をなす事から、池田城築城に際して大規模な土木工事が行なわれたものと思われる。尚、地山層は、建築基礎レベル

の関係から、サブレンチで一部しか検出しなかったが、この地山上面には焼土、炭層が認められ、池田城落城の際の火災を示すものと考えられる。

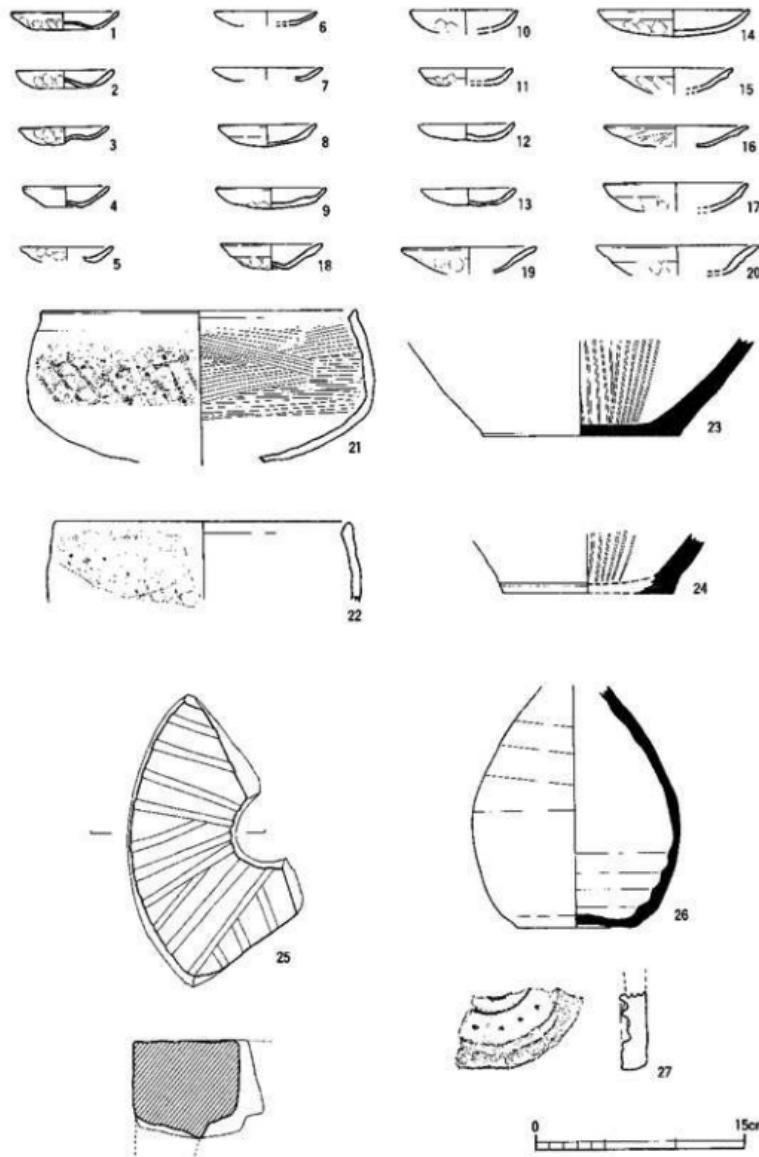
石組造構（第5図）

トレンチ北側において、第6層上面で検出したものである。使用されている礫は全て不規いで、拳大から人頭大の大きさを有し、丸味を帯びた河原石のものから、五月山の洪積層より採集されたと考えられるものがあり、一点のみ花崗岩製の石臼片がみられる。この造構の範囲は東西2.2m、南北3.2mで、礫は無雑作に組まれているが南辺のみに特に意識的に整然と並べられており、二個の礫石と思われる上面の平出な石材、或いは当造構検出面がこの石組造構より南へ緩い傾斜をもつ事から、何らかの建築物の南辺に相当するのではないかと考えられる。

尚、造構上面及び造構の南側一帯には厚さ10cmの炭がみられ、また礫のうち火を受けて変色しているものが認められ、建築物が何らかの原因によって火災にあって消失したものと推定される。時期は石組造構直上より多数破棄された状態で出土した土師皿より、概ね17世紀前~中葉と考えられる。尚トレンチ南隅においても行列状の造構を検出したが石材が少なく、また途中で失なわれているため、建築物に伴うものか否か判断できない。



第5図 石組造構平面図



第6図 出土遺物実測図

V. 出土遺物

出土遺物の大部分は、推積土層内に包含されていた近世以降のものであり、池田城に係る遺物は少量しかない。図に掲載したものは、石組造構に伴うもの及び下層の第6層内出土であり古銭は近世の整地層から出土している。

石組造構直上出土土師器皿 (第6図 1~17)

口径7cm前後的小皿と口径10cm前後の中皿の2種類が認められる。小皿は形態により概ね3種類に分けることができ、I・中世のいわゆるヘソ皿のように内側中央が隆起するもの(1~5) II・口径に対して器高が低く扁平な感じをもつて口縁部がやや開き気味のもの(6、7)、III・IIに比して器壁が厚く底部がやや弯曲し丸味を帯びてII縁部になるもの(8~13)がある。

Iは(5)以外胎土が粗く、外面には指頭圧痕が顕著に認められ、内面は「の」字状のユビナデによる。概して粗雑な製作であり、内面には油痕が付着していることから、このタイプは上として灯明皿として使用されたことが窺える。(5)は胎土が精良で製作も丁寧であり、内面には油痕が認められない。その形態から他のものと比べ時期的に若干遅るものかもしれない。IIは内外面とも丁寧なヨコナデが認められ、胎土も精良である。IIIは粗雑な胎土で外面底部を中心に指頭圧痕が残るが、Iほど顕著ではない。内面は「の」字状のナデのほか、一方向のナデが認められる。(10)のみ内面に油痕が認められる。

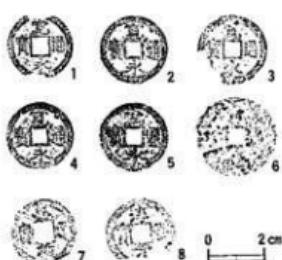
中皿は2種類の形態があり、I・丸味を帯びた底部を有し、II縁部との境が不明瞭なもの(14)、II・底部から直線的に開き口縁部となるもの(15、16)がある。Iは精良な胎土を使用し、外面に指頭圧痕が認められるものの丁寧な製作である。IIは外面に粗いユビナデが認められ、強いヨコナデにより、II縁部は弯曲している。ここに掲げた中皿は何れも内面に油痕は付着していない。

第6層内出土土器 (18~20)

ここでは大中小の3種類の七脚器皿が出土している。小皿(18)は口径7cmを測る内側中央部が隆起したいわゆるヘソ皿である。胎土は精良で、外面は指頭圧痕が残り、内面は「の」字状のナデがみられる。中皿(19)は口径9.6cmを測り底部から開き気味にII縁部となり、その境が不明瞭になっている。胎土はやや精良で、外面には指頭圧痕が残り、内面はナゼ調整である。大皿(20)は口径11.6cmを測り、底部より明瞭に屈曲して口縁部へ移行する。外面には若干指頭圧痕があり、内面はナゼ調整である。

石臼 (25)

石組造構に転用されていた花崗岩製の粉挽き臼の下臼で、大半は砂損している。摺臼は三本一組で右回りに施されているが、溝の深さは1mm程度しかなく磨滅が著しい。芯木孔は上部で径4.8cmを測り、下方に向かって広くなっている。



第7図 古銭拓影

焰鉢 (21, 22)
第6層上面で検出した炭層内より出土した土師質の焰鉢である。(21)は口径22.4cmを測り丸味を帯びた底部から内方に立ち上がる口縁部を有し、口縁端部は内傾する面をもつ。外面底部から口縁部にかけて斜格子のタタキが認められ、一部ナデによって消し去っている。内面は底部に丁寧なナデで、口縁部は横ハケの後ヨコナデを施す。(22)は推定口径21.2cm測り若干内

擂鉢 (23, 24)

何れも丹波産の擂鉢と思われ、底部のみ出土している。内面には幅2mm程度の擂目を密に施し、外面は横方向のナデ調整である。

徳利 (26)

第6層上面より出土した備前産の徳利で、口縁部は欠損している。胴部は中央部や下方に最大径をもち、糸切り模様のある平底を有する。内外面ともナデによって仕上げている。

瓦 (27)

第6層上面より出土した三つ巴文の軒丸瓦である下半部4分の1ほど残存しており詳細は不明である。珠文は非常に小さく巴文の尾は長くのびて界線風となっている。

古銭 (第7図)

「寛永通宝」(1~6)、北宋銭の「嘉祐通宝」(7)、南宋銭の「淳熙元宝」がある。「寛永通宝」は径2.3~2.4cmのものと径3cmの2種類がみられる。

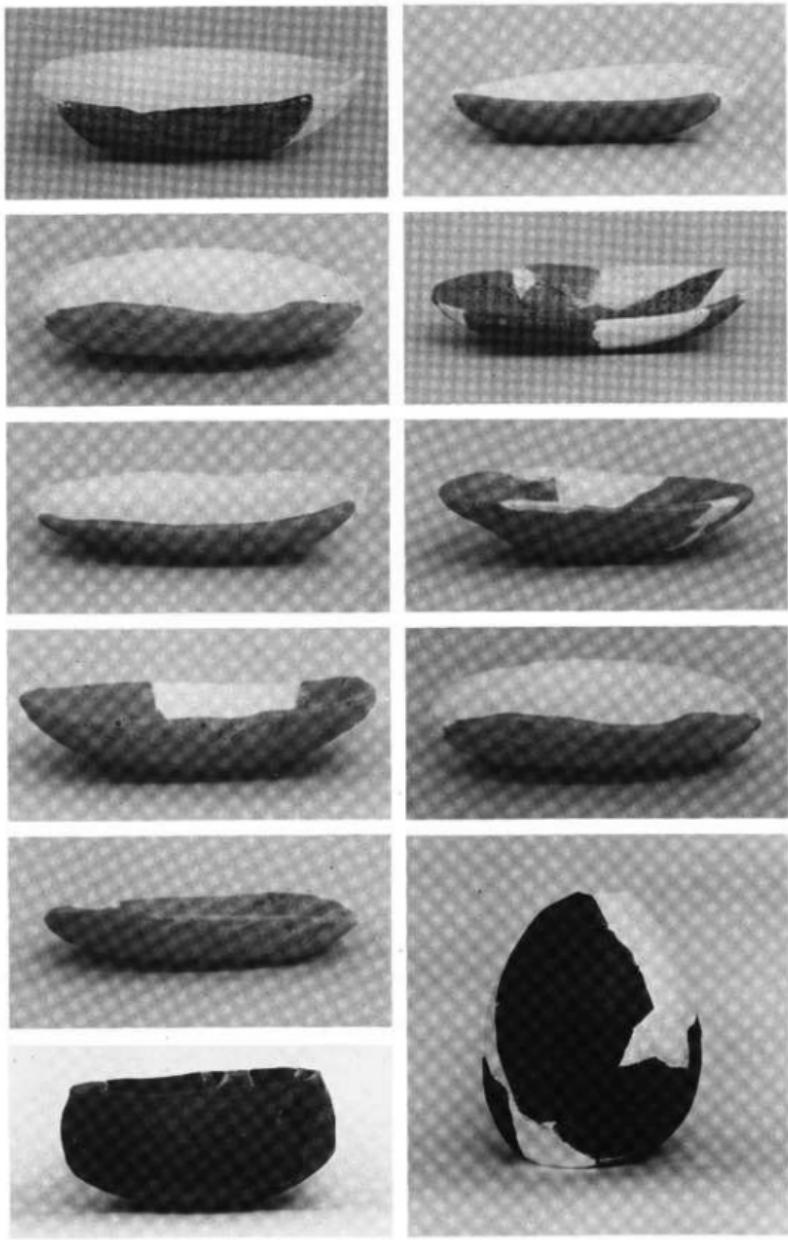


(1) トレンチ(南から)



(2) 石組造構

圖版2
池田城86—1次



神田北遺跡86－1次発掘調査概要報告

例　　言

1. 本書は、池田市神田1丁目1330—6において実施した個人住宅改築工事に伴う発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は、昭和62年2月26日から同年2月27日にかけて実施した。
3. 発掘調査は、本市教育委員会社会教育部社会教育課社会教育係が実施し、田上雅則が現地を担当した。
4. 調査の進行にあたって、施主並びに近隣住民の方々に深甚なる御理解、御協力をいただいた。未筆ではありますが、深く感謝いたします。

目　　次

I. はじめに.....	51
II. 調査の概要.....	51

I. はじめに

神田北遺跡は池田市神田、八王寺一帯に広がる、縄文時代から中世に亘る複合遺跡であり、本遺跡は猪名川左岸の標高20mを測る洪積台地に立地している。発見当初は脇塚古墳の周辺に所在しているものと考えられていたが、1986年に本古墳の東方300mの地点で民間のビル建設中に古墳時代の掘立柱建物跡が発見され、更に東方へ広がっている事が判明している。しかしながら、現在までに広範囲の調査が行なわれておらず、遺跡の性格や脇塚古墳との関係など不明な点が多い。

今回の報告は池田市神田1丁目1330-6において個人住宅建築工事に先立ち造構面までの深度、分布状態の把握を目的とした試掘調査である。

II. 調査の概要

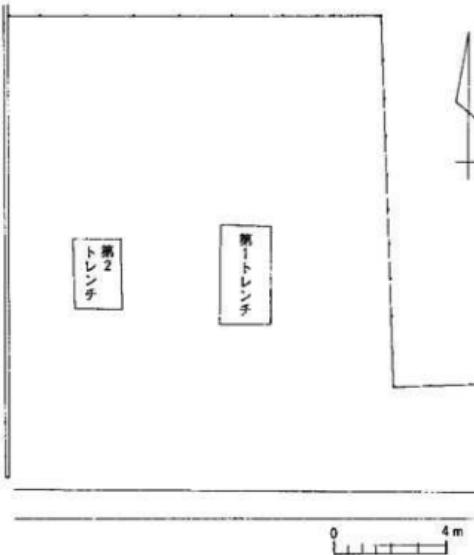
調査は敷地範囲内に2ヶ所トレンチを設定して実施した。両トレンチとも同様の層序を示し5層に区分される。このうち第1層は耕作土で、第2層は床土である。第3層は暗青灰色粘質土で細片化した土器を若干含んでいる。第4層は淡黒灰色を呈する有機質の粘質土で、古代～



第1図 調査地点位置図

中世の土器片を少量含んでいる。第5層は黄褐色粘質土の地山となる。第1トレンチにおいて掘立柱建物跡の礎石と思われる、30cmの大きさで上面の平坦な石材を検出した。また第2トレンチ西壁断面において幅15cmのピットを確認したが、これら以外に遺構は認められなかった。

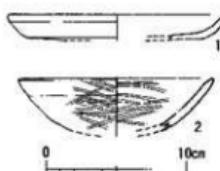
出土した遺物のうち図化し得たものは2点のみである(第4図)。(1)は須恵質の皿である。口径は推定で15.6cmを測り、口縁部から底部に向って丸くなだらかなカーブを描く。(2)は推定口径13cmを測る和泉型の瓦器柄である。外面とも粗いヘラミガキが施され、口縁部には強いヨコナデが認められる。尚、図化し得なかったものの中には白磁皿や須恵器片などがみられる。



第2図 トレンチ配置図



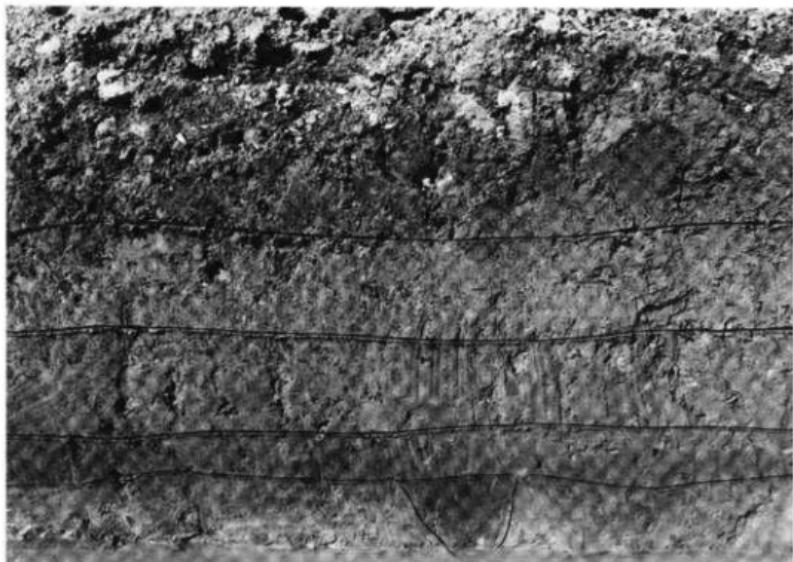
第3図 トレンチ断面図



第4図 出土遺物実測図



(1) 第1トレンチ(南から)



(2) 土層断面



池田市文化財調査報告第5集
池田市埋蔵文化財発掘調査概報
1987年3月
発行 池田市教育委員会
池田市城南1-1-1
編集 社会教育課 社会教育係
印刷 西村印刷株式会社